

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」

第一部「熊野信仰と神々」



熊野速玉大神像



熊野大須賀大神像



家津美御子大神像

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

熊野は三つの大社である「速玉大社」、「那智大社」、「本宮大社」を有し、総称して「熊野権現」という。記紀の祖神を思わせる神々と修験道や仏教を混合し、神仏習合を体現化した霊域である。熊野権現と熊野三大社の縁起を記紀を踏まえて解き明かしていきます。

著者：有限会社 情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーの田やコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。」

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元々としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」の第一部「熊野信仰の神々」では、熊野は三つの大社である「速玉大社」、「那智大社」、「本宮大社」を有し、総称して「熊野権現」という。記紀の祖神を思わせる神々と修験道や仏教を混合し、神仏習合を体现化した霊域である。熊野権現と熊野三大社の縁起を記紀を踏まえて解き明かしていきます。本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

＋「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」 島田裕巳著（幻冬舎）

＋「熊野大神」加藤隆久監修（戎光祥出版）

＋「徐福伝説を探る」日中合同シンポジウム（小学館）

＋「日本書紀」（宇治谷 孟著、講談社）

＋「古事記」（竹田恒泰著、学研）

＋「日本史図録」（山川出版社） など

本冊子の古代史シリーズ5「神社と神々」の第一部「熊野信仰の神々」の全体構成は次の目次にあります。

古代史シリーズ5 「神社と神々」の第一部「熊野信仰の神々」の目次

第一章 「熊野権現と神々」	4
熊野信仰の熊野もうでの由来と熊野三山の熊野権現の神々の全体観を捉える。	
第二章 「熊野信仰の礎」	20
熊野信仰の修験道、信仰者、そして熊野神の垂迹縁起をたどる。	
第三章 「熊野速玉大社の神々と由来」	31
熊野三山の神々の基礎にある熊野速玉大社の神々とその由来を把握する。	
第四章 「熊野那智大社の神々と由来」	42
熊野修験道の根幹にある死霊の山「熊野速玉大社の神々」。神や浄土を見た滝行、補陀洛浄土信仰を捉える。	
第五章 「熊野本宮の神々と由来」	53
熊野信仰の中核にある神仏習合実践の熊野本宮の神々と記紀との整合性を読む。	
おわりに	65

第一章 「熊野権現の神々」の目次 ◎

第一話	神社の一般知識	5
第二話	熊野詣の由来	10
第三話	熊野権現	13
コラム	「神代七代と別天神」	18

第一話 神社の一般知識

『日本の古代史とその文化』セミナーのシリーズ5の「日本の神社と神々」では神社の観点から記紀の神々を捉えていきます。まず最初に、日本の神社にまつわる一般的な知識を整理しました。日本にはどのくらいの数の神社があるのかを平成二年から七年に行われた「全国神社祭祀祭礼総合調査」（神社本庁・宗教法人）からみると、神社総数は七万九三五五社です。

神社はその神の信仰があることから、神の信仰別に神社の数の順位付けをしますと、第一位は八幡神への「八幡信仰」をもつ八幡神社・八幡宮・若宮神社などの八幡信仰の神社で七、八一七社。祭神は十五代応神天皇（誉田別尊・ホムタワケノミコト）と言われる戦の神で、総本山は宇佐大社である。第二位は天照大御神を祭神とする伊勢信仰の神社で、その神社には神明社、神明宮、皇大神社、伊勢神宮などがある。第三位は菅原道真公を祭神とする天神信仰の神社で天満宮、天神社、北野神社などがある。第四位は伊呂具秦公（いろぐはたのきみ）により創祀された稻荷信仰（稻荷神社、宇賀神社、稻荷社など）、第五位が熊野三山の熊野信仰（熊野神社、王子神社、十二所神社、若一王子神社など）がある。以下十位まであげると、第六位は諏訪信仰（諏訪神社、諏訪社、南方神社など）、第七位は祇園信仰（八坂神社、須賀神社、八雲神社、津島神社、須佐神社など）、第八位は白山信仰（白山神社、白山社、白山比咩（ひめ）神社、白山姫神社など）、第九位は日吉信仰（日吉神社、日枝神社、山王社など）、第十位が山神信仰（山神社など）となる。記紀に大きく取り上げられる大国主命を祭神とする出雲大社の大国主信仰が三百社と極端に少ない。国譲りの後、天照大神の世になって以降は信仰の拡大が抑えられたのであろう。

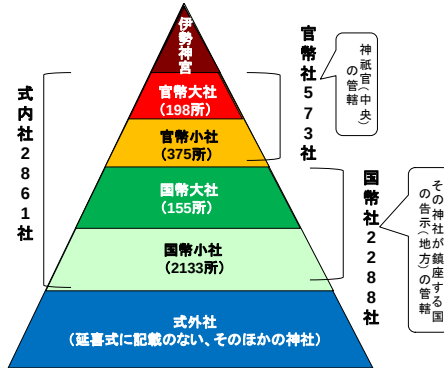
◆神社の制度

神社制度は、「延喜式（えんぎしき）」が基本にある。延喜式とは平安中期の律令で格式を定めた施行細則であり、全五〇巻。九〇五年（延喜五）、藤原時平らが醍醐天皇の命により編纂を始め時平の死後、摂政藤原忠平らにより九二七年完成し、九六七年に施行された。神社の格式は『延喜式』の巻九・十の「延喜式神名（じんみょう）帳」にまとめられ、当時「官社」に指定されていた全国の神社一覧である。

神社の格式は延喜式神名帳に記載された神社は「式内社」と言われ、官社になる。伊勢神宮のもとに式内社（しきないしや）は官幣社（かんぺいしや）五七三社と国幣社（こくへいしや）二二八社に分けられ、官幣社は中央の神祇官の管轄であり、国幣社はその神社が鎮座する国の国司（地方）の管轄とした。その官幣社と国幣社はさらに官幣大社・小社と国幣大

参照資料1-1:神社の格式

「延喜式神名帳」にて成立(927年)



注: 大社と小社の違いは、幣帛が案(神事用の台)の上に備えられるか、下に備えられるかにあった。
出典:「神社に秘められた日本史の謎」(洋泉社MOOK)

参照資料1-2:神社の社名

社号	意味
大神宮	伊勢神宮(皇大神宮)を表す。
神宮	皇室の祖神や歴代天皇、皇室と縁の深い神を祭神とする神社。鹿島神宮、平安神宮など。
宮	嫡男系の皇孫を祭神とする神社(菅崎宮、香椎宮)。東照宮の様な例外も多数ある。
大社	戦前までは出雲大社だけであったが、稲荷神社の様に特定の神を祭神とした神社グループの「本社」を言うようになった。
名神大社	日本の律令制下において、名神祭*の対象となる神々(名神)を祀る神社。その全てが大社(官幣大社・国幣大社)に列していることから「名神大社」と呼ばれる。 (注) 名神祭(みょうじんさい)は国家的事変が起こり、またはその発生が予想される際に、その解決を祈願するための臨時の国家祭祀である
神社	一般的な社号で且つ神社の総称。
社	規模の比較的小さな神社。

出典:「神社に秘められた日本史の謎」(洋泉社MOOK)

社・小社に格付けされた。大社と小社の違いは、幣帛(いはく)が案(神事用の台)の上に備えられるか、下に備えられるかにあった。
参照資料「」を使得まゝとめましよう。神社の社名(社号)は大神宮を筆頭に格式が設けられた。

「大神宮」とは、伊勢神宮(皇大神宮)を表す。

「神宮」は、皇室の祖神や歴代天皇、皇室と縁の深い神を祭神とする神社で、鹿島神宮、平安神宮などがある。

「宮」は、天皇の嫡男系の皇孫を祭神とする神社(菅崎宮、香椎宮など)であるが、日光東照宮の様な例外もある。

「大社」は、延喜式の制定前までは出雲大社だけであったが、稲荷神社の様に特定の神を祭神とした神社グループの「本社」を言うようになった。

「名神大社」は、日本の律令制下において、名神祭(みょうじんさい)の対象となる神々(名神)を祀る神社で、その全てが大社(官幣大社・国幣大社)に列していることから「名神大社」と呼ばれる。名神祭は国家的事変が起こり、またはその発生が予想される際に、その解決を祈願するための臨時の国家祭祀である。

「神社」は、一般的な社号で且つ神社の総称である。「社(やしろ)」は、規模の比較的小さな神社である。次に、神社の構成要素を見ていきます。神社に行くと摂社(せつしや)や末社(まつしや)という社があるのに気づく。神社には、その神社の大

元をなし、中心となる祭神が祀られている社を「本社（ほんしや）」といいます。本社にはその祭神の関りによって摂社や末社が設置されています。格式が高い順に説明します。

「摂社」とは、祭神と縁の深い神を祀った社で、摂社の方が末社より社格が高い。その配置場所は本社の境内に祀った境内社と境外に祀った境外社（けいがいしや）がある。明治から戦前までの^注近代社格制度では、官・国幣社の摂社は以下のいずれかを満たすものとされ、それ以外は末社とされました。（^注延喜式を明治になって再整理した制度である。

＋本社の祭神の後神・御子神等、系譜的に連なる神を祀る神社

＋本社の祭神の荒魂（あらみたま）を祀る神社

＋本社の地主神（祭神が現在地に遷座する前に当地に祀られていた神）を祀る神社

その他、特別の由緒がある神社

「末社」は、祭神と縁の深い神以外のものを祀った社です。出雲大社を例にとると、祭神は大国主命、その祖神の素戔嗚尊や後の須勢理毘賣命（スセリビヒメノミコト）は摂社に祀られ、出雲の神在月（かみありづき）に集まる八百万（やおよろず）の神は末社に祀られています。そのほか、

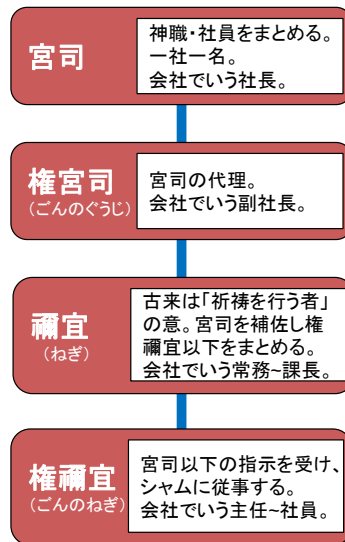
「別社（べつしや）、別宮（べつぐう）」は、本社と祭神は同じで別の場所に設けられた神社です。例えば、伏見稻荷神社の別社に東京の笠間稻荷神社があります。

「分社（ぶんしや）」は、本社の祭神を分霊して祀った神社です。必ずしも本社の支配を受けることなく、独立している場合が多い。全国の神社の中で最も分社が多いのは稻荷社で、約三万二千社ある。それ以外に八幡社、神明社、天神などの分社が多い。別場所になる場合、勧請（かんじよう）によって祭神の霊を迎えます。勧請とは神仏の分霊を請（しょう）じ迎えることをいいます。

「鎮守社」は、土地に根ざしてその場所を守る神（産土神・ウブスナカミ）を祀る社をいいます。神仏習合の結果、寺の鎮守のために建立された神社や中世後期以降、鎮守の神を祀まつる神社一般をさすようになりました。童謡にある「森の鎮守」です。特定の建造物や一定区域の土地を守護するために祀られた神ですから、村ごとに設置されました。以上のような神社にお勤めされる神職の格式を見ていきましょう。

神社に務められている神職も格式によって職階が定められています(参照資料1-3)。よく「神主(かんぬし)」という言葉を聞きますが、神主は神職ではありません。神主とは、神職ではなく、神事や祭事を主宰する人を言います。仏教での喪主や施主に当たります。「巫女」も必ず神社にはいますが神職ではありません。「巫覡(ふげき)」といい、神職を補佐する役割です。女性には「巫(ふ)」で巫女を指し、男性の場合は「覡(げき)」といいます。古来より巫女は神楽を舞ったり、祈禱をしたり、占いをしたり、神託を得て他の者に伝えたり(口寄せ)などをする役割でした。神職の職階の基本は宮司、権宮司(ごんぐうじ)、禰宜(ねぎ)、権禰宜の四階層です。宮司は、神職・社員をまとめ、一社一名です。会社でいう社長に当たります。権宮司は、宮司の代理で、会社でいう副社長に相当します。禰宜は、古来は「祈禱を行う者」の意です。宮司を補佐し権禰宜以下をまとめ、会社でいう常務から課長あたりですが、神社の中核の業務である祈禱を行うことから重要な位置付けにあります。権禰宜は、宮司以下の指示を受け、社務に従事し、会社でいう主任から社員に当たります。この職階は神社の規模によって、「権」に副を付けて「副権・」のように階層が増える場合があります。神社は中央政府が神社行政を統括することで、全国支配のツールでした。しかし、平安時代も十一世紀ころになると、律令制自身にほころびが出て統制がでにくくなりました。そこで、朝廷は「二十二社・一之宮制」を造り、求心力を高めました。

参照資料1-3:神職の職階



出典:「神社に秘められた日本史の謎」(洋泉社MOOK)

この制度は、中央の鎮守と地方の統制強化が目的で、式内社を含む社格の再編を図りました。中央では二十二社制を引き、朝廷から特別な崇敬を受けた有力神社を指定し、朝廷を鎮守するという意味で「皇城鎮守(こうじょうちんじゆ)」とも呼ばれ、祭祀(さいし)は朝廷直轄で行われました。上七社、中七社、下八社に格付けした。最も格式の高い上七社には、神宮(伊勢神宮)、石清水八幡宮、賀茂別雷神社(上賀茂神社)・賀茂御祖神社(下鴨神社)、松尾大社、平野神社、伏見稻荷大社、春日大社を置き、中七社には大神神社、石上神社、住吉大社などを指定し、下八社は、日吉大社、八坂神社、北野天満宮などを中央政府鎮守として格付けしました。

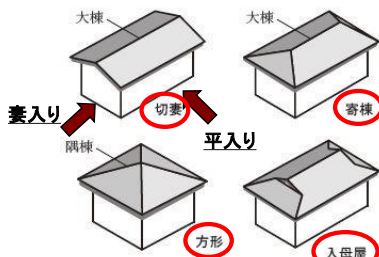
一方、地方は一之宮制を敷きました。最上位格に総社(そうじや)を置き、一宮(いちのみや)、二宮、三宮に格付け分類

しました。総社は国内の有力神社の祭神を勧請して祀り統括しました。平安時代に国府の近くに総社を設け、そこを詣でることで巡回を省き簡略化できるように制度化されました。武蔵国に大國魂（おおくにたま）神社、常陸国には常陸國總社宮など各国に設置した。この制度ができる前は国司が着任すると一宮から三宮まですべてに詣でました。一宮は、原則的に令制国一国（律令制で国府がある）当たり一社を建前にした。国内で一番格が高い、国の総鎮守である。認地に赴いた国司は国内の有力神社を格の高い神から順に巡拝するが、その順序に応じ一宮以下、二宮、三宮とされた。浅間神社（甲斐国）、寒川神社（相模国）、氷川神社（武蔵国）、住吉大社（摂津国）、出雲大社（出雲国）などが一宮の格付けになった。

◆神社の建築

神社の建築様式は様々ですので、参照資料「1-4」を用いて代表的な神社を捉えて解説を加えます。まず、神社に限らず日本建築の屋根の形式と入口の向きに特徴があります。代表的な屋根の構造は切妻（きりつま）造、寄棟（よせむね）造、入母屋（いりもや）造、方形（ほうけい）造がある。切妻造は本を伏せたような形で最も一般的な構造、寄棟造は四方向への葺き下しの構造、入母屋造は切妻造に庇（ひさし）を付けた構造を持つ。そして、建物への入り口は切妻造を例にとると、切妻部にあるものを「妻入り」といい、棟にあるのを「平入り」という。神社の建築様式で代表的な三様式を挙げておきます。

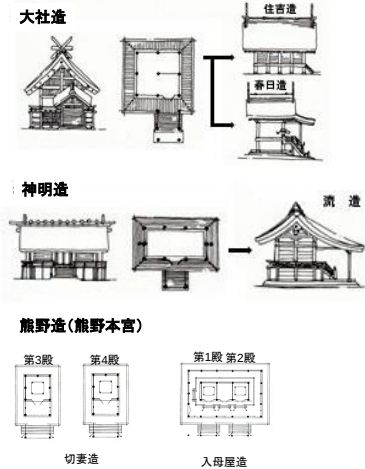
参照資料1-4:屋根の代表構造



出典:ウィキペディア)

参照資料1-5:神社の建築様式(基本形)

出典:ウィキペディア)



「大社造」は出雲大社の建築様式で、神社建築の基本になったものです。大社造の構造は注掘立柱（ほったてばしら）、切妻造、屋根の妻側から入る「妻入り」ですが、妻入りの入口が中央からずれる非対称形を有します。注建物の柱を敷石はなく直接埋め込んだ柱を言い、最も原始的な立て方です。この流れで、「住吉造」（住吉神社）・「春日造」（春日大社）があります。

「神明造（しんめいづくり）」は伊勢神

注：伊勢神宮では「瑞垣」と「玉垣」が出雲大社とあべこべ



10

釈迦の死後二〇〇〇年後にこの世の終わりが来るという仏教の歴史観で一〇五一年が末法の始まりということになる。平安の後期から末法の世界にあり、鎌倉時代は末法の世界になる。末法の期間は釈迦が五十六億七千年後に再来するまで続きます。そのた釈迦不在の時間を補うため釈迦の代行として地藏菩薩が遣わされました。地藏菩薩は、「お地藏さん」の愛称で知られますが、「大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救う所から名付けられた。」とされる。

そこに、法然の「浄土宗」が誕生する。法然は「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えれば、誰でも極楽往生が約束されると説く。南無阿弥陀仏とは、「南無」が帰依(きえ)するという意味ですので、「阿弥陀仏に帰依します」と称名するだけであり、称名念仏と言われる。出家して僧侶になる必要もない、修行も必要ないため、庶民にとって受け入れ易い画期的な宗教になりました。日本における称名念仏の元祖と言われる。

浄土宗とは、現世利益を追求するのではなく、浄土(＝仏の住む苦しみのない世界)への往生(＝浄土に生まれること)を求めることで、現世の苦しみから逃れることを説く教えである。「厭離穢土・欣求浄土(おんりえど・こんぐじょうど)」と説く。この意味は「苦悩の多い穢れたこの世(穢土)を厭(いと)い離れたいと願い、心から欣(よろこ)んで清涼な浄土(仏国)を冀(こいねが)う」という教えである。その極楽浄土が熊野にあるという。熊野はまさに^注神仏習合の地なのです。(注)神道(しんとう)信仰と仏教信仰とを融合調和する」と

熊野は、海彼常世(かいひとこよ)の接点の地と言われていました。海彼とは、海のかなたということですから、海のかなたの常世(天竺を指すらしい)への接点で繋がっているというのです。確かに、熊野の地は本州では最南端にあることで黒潮に乗って異なる世界のものが届き、常世との接点として捉えたのだらうと思われます。那智大社がある「那智」は観世音菩薩の住まう「補陀落(ふだらく)浄土」と言われました。補陀落浄土とは、那智の南方にある観音様(千手観音)のいらつしやる補陀落浄土です。その他にも阿弥陀様の西方極楽浄土、薬師如来の浄瑠璃浄土(じようるりじょうど)、お釈迦様の靈山浄土(りようぜんじょうど)などがあります。靈山は釈迦がしばしば説法を行ったとされる靈鷲山(りようじゆせん)の略称名です。《法華経》は靈鷲山で説かれたので、釈迦の浄土とされました。

熊野速玉神社のある新宮は薬師如来の「東方浄瑠璃世界」とみなされ、熊野本宮大社は「西方極楽浄土」、熊野那智大社は「補陀落浄土」とされ熊野三山が浄土だったわけです。

熊野には仏教だけでなく、熊野信仰を高めたものに神の存在を意識させる熊野三山の自然環境があります。熊野は、他界・異郷・常世への出入り口であり、日本一の霊場であるといわれます。それは、熊野三山の環境が自然崇拜を作り出す環境を有しているのです。熊野のある紀伊半島は大海流の黒潮が通り抜けて行きます。この黒潮に乗って、見たこともない文物や人々が渡来してきたことから黒潮信仰が生まれます。黒潮信仰は海のかなたから漂着する稀人神（まれひとかみ）の観想の上に成立したものであり、海彼常世（かいひとこよ）との接点の地として常世信仰を生みしました。かくして、徐福（じょふく）伝説、伊邪那美尊（イザナミノミコト）の葬送伝承（書紀）、少彦名命（スクナヒコノミコト）の常世行きが作られました。

速玉大神（ハヤタマオオカミ）を主神として祀る熊野速玉大社（新宮）は、熊野川が海に注ぐ南岸にあり、黒潮洗う太平洋に面していたため海外よりの渡来者が多く、常世伝説が残っている。新宮に伝わる「御船祭（みふねさい）」は神の鎮座を思わせる例祭であり、先進技術を持った渡来人が住み着き地盤を固めていたのであろう。神武天皇の故事で名高い神倉山（かみくらやま）の峙立（そばだち）も霊地としての想いを高めた。

夫須美大神（フスミオオカミ）を主神とする熊野那智大社（那智）は、祭神組織が成立する以前から美しい那智の滝で名高く、この瀑布をご神体と仰ぐ信仰が発達したことは明白であった。この地は修験として滝行の聖地になっていく。

家都美御子大神（ケツミミコノオオカミ）を主神とする熊野本宮大社（本宮）には、熊野川・音無川・岩田川の合流する巴ヶ淵（ともがふち）のあたりの大斎原（おおゆのはら）が^注幽邃（ゆうすい）の地であり、修験道の聖地である大峰・吉野への入り口でもあった。（^注景色などが奥深くて物静かなこと）

まさに、熊野三山は自然の中にそれぞれが神を有し、修験道の発達によつて、「本宮と大峰修行」、「新宮と神倉修」、「那智と滝修行」という修験道の霊地となった所以は熊野三山の自然環境がベースにあったのです。

熊野三山は神と仏が存在する霊地ですが、熊野信仰を高めたものに平安後期（十一世紀末）から盛んになった「熊野詣」があります。その代表が上皇・法王の御幸（ごこう）です。この熊野御幸の上位には鳥羽上皇（二十一回）、後白河上皇（三十四回）、後鳥羽上皇（二十八回）があり、九名の上皇・法王が実践されています。京から陰陽師のお告げによつて御幸時期が決定され、約八百名の従者を引き連れ一か月半ほどの行程で往復する大行事です。後白河上皇が^注梁塵秘抄（りょうじんひしょう）に、「熊野へ参るには、紀路と伊勢路のどれ近し、どれ遠し、広大慈悲の道なれば、紀路と伊勢路も遠からじ」という歌を残しています。（^注平安時代末期に編まれた歌謡集。今様歌謡・流行歌のようなもの）の集成。登場するのは遊女、傀儡子、博徒、修験僧など秩序の外側に生きる人々だった。編者は後白河法皇。

参照資料1-7：熊野三神と国常立命



熊野速玉大神像



熊野夫須美大神像



家津美御子大神像

出典：ウィキペディア



国常立命像

熊野三山は、日本の神社の中でも最も古い神々を祀る。記紀でいう造化三神（どうかさんしん）や神代七代（かみよななよ）の神々である。記紀でその祖神に熊野の神々を記載しているということは熊野の神々には日本の祖神が居たのではあるまいか。熊野三山の社殿構成と祭神から調べてみよう。

◆熊野三山社殿構成と神々

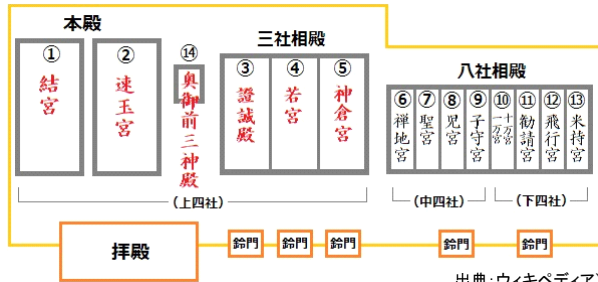
熊野権現は熊野三所権現、熊野十二所権現と言われる。この祭神を祀る社、熊野三山の社殿は中核になる三所権現、そして関係祭神を含めた十二所権現からなる。建築様式は平入、妻入りそして入母屋、切り妻造が混在する「熊野造」である。熊野三山の権現は熊野本宮大社が現在地に四柱、旧社地大斎原（おおゆのはら）に八柱の十二柱。新宮にある熊野速玉大社は十二柱（十二所権現）、那智にある熊野那智大社は一柱が加わり十三所権現である。祭神の中心にある熊野三所権現とは、家都美御子（ケツミミコ）大神（本地仏：阿弥陀如来）、速玉（ハヤタマ）大神（本地仏：薬師如来）、夫須美（フスミ）大神（本地仏：千手観音）の三神で、それぞれの神が熊野三社の主祭神に祀られている。速玉大神は速玉大社の主祭神、夫須美大神は那智大社の主祭神、家都美御子大神は本宮大社の主祭神である。

参照資料「1」の左上から右に速玉大神、夫須美大神、家都美御子大神である。速玉大神と夫須美大神はその堂々とした風貌から、その地に根差した首長夫婦のように見える。図表の左下に国常立尊（クニトコタチノミコト）像がある。国常立尊を除くこの三体は製作時期が九世紀で、彫刻技術が同じであり同一の彫刻師の制作であることが判明している。また、この三体が速玉大社の主祭殿に祀られているのを見ると親子ではないかと考えられる。そして、国常

この影響を受けて、京（みやこ）では院・宮・権門（けんもん）、勢家（せいけ）への信仰が広まり、さらに武家、庶民へ普及していきました。権門・勢家とは権力や勢力のある家柄のことです。

第三話 熊野権現

参照資料1-8-①:熊野速玉大社社殿配置図



出典: ウィキペディア)

立尊とは記紀に言う神代七代(かみよななよ)の最初の神の名前である(コラム参照)。家都美御子大神は本宮の主祭神で第三殿に鎮座する神であるが、彫刻時期は十世紀で彫刻技術も異なり、後付けの神ではないかともいわれる。これらの神が鎮座する熊野三山の社殿構成を見てみよう。

熊野三山の権現の社殿配置を見ていくと速玉大社が最も整然と配列されていることに気付く。速玉大神を主催神とする速玉大社を基本に、社殿配置と熊野十二所権現の祭神と関係づけてみましょう。

① 熊野速玉大社

熊野速玉大社の主祭神は速玉大神です。第二殿が祭神の坐(い)ます速玉宮であり、^注本地仏は薬師如来を祭ります。拝殿はその社殿の前にあり、そこに速玉大神が鎮座します(参照資料1-8-①、1-9)。(注)聖徳太子により発布された神仏習合

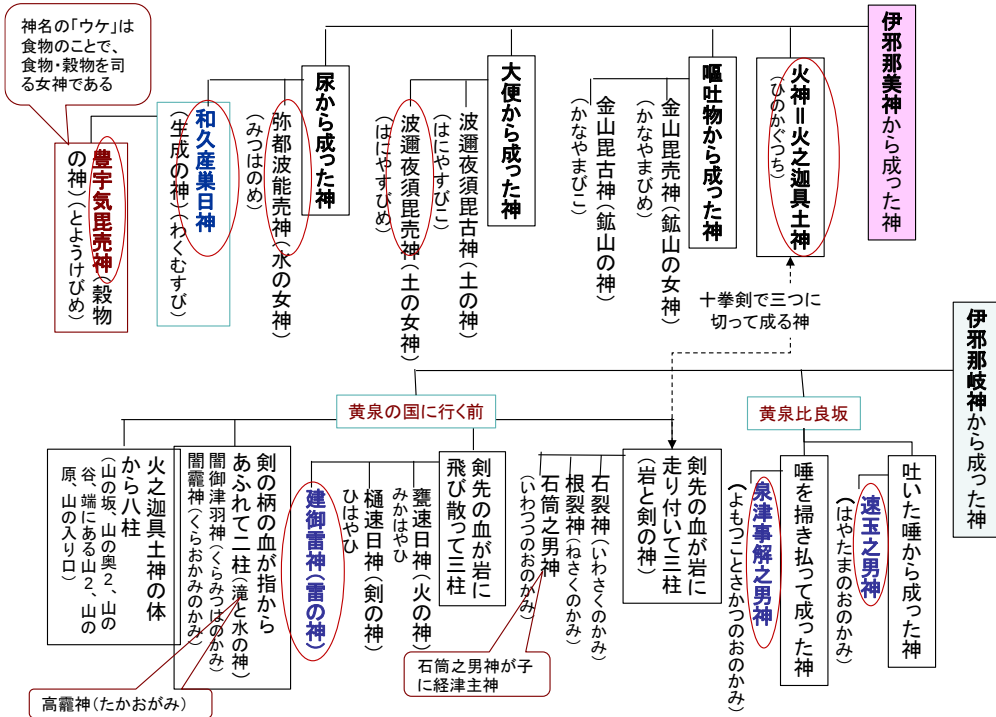
は神は仏の仮の姿という本地垂迹説をとります。この仏を本地仏といいます。

左隣の本殿の第一殿(①)は結宮(むすびのみや)で、夫須美大神が祭神で本地仏として千手観音を祀ります。ちなみに、記紀では、伊邪那岐神が伊邪那美神に黄泉(よみ)の世界で会って逃げ帰るとき、黄泉の世界から黄泉比良坂(よもひらざか)で吐いた唾から成った神として、速玉之男神を挙げ、夫須美大神を伊邪那美神が火神の火之迦具土神(ヒノカグツチ)を生んでホトを大やけどし、尿をした時に成った生成の神として記述しています。「夫須美(フスミ)」は「久須毘(クスビ)」ともいい、「奇火(くすひ)」のことで、火の神を表す。速玉大社の本殿の主祭神は何か伊邪那岐と伊邪那美の神を見ているような気がしますね。

第三殿は証誠(しょうじょう)殿で、祭神は国常立尊(クニトコタチノミコト)であり、本地仏は阿弥陀如来です。記紀によれば、国常立尊は日本国が永久に立ち続ける役割を持つ神代七代の最初の神として記述されます。速玉大神の若宮(跡継ぎの宮をいう)を思わせませう。第四殿以降は三山ともに本宮に若干異なるところはあるが、ほぼ同じ祭神が祀られます。概略を記述しておきます。

第四殿は若宮で、祭神は天照大神です。天照大神は皇室の祖神で、日本国民の総氏神であり、イザナギ・イザナミノ尊の若宮です。若宮とは親王家の世継ぎを祭った社をいいます。第五殿は禪師宮(ぜんじのみや)で、祭神は天忍穗耳尊(アマノオシホミミノミコト)です。天照大神の子で、スサノオとの誓約(うけい)で成る神です。

参照資料1-9:伊邪那美神の死出の前後の「神生み」(古事記)



出典：「古事記」（竹田恒泰著、学研）

第六殿は聖宮（ひじりのみや）で、祭神は瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）です。天忍穗耳命の子で、天照大神の孫にあたり、天孫降臨で葦原中国（あしはらなかつく）に降りてくる神です。

第七殿は児宮（ちごのみや）で、祭神は彦火火出見尊（ヒコホホデノミコト）です。瓊瓊杵尊と木花之佐久夜毘売（コノハナサクヤビメ）の子で「山幸彦（ヤマサチヒコ）」ともいいます。

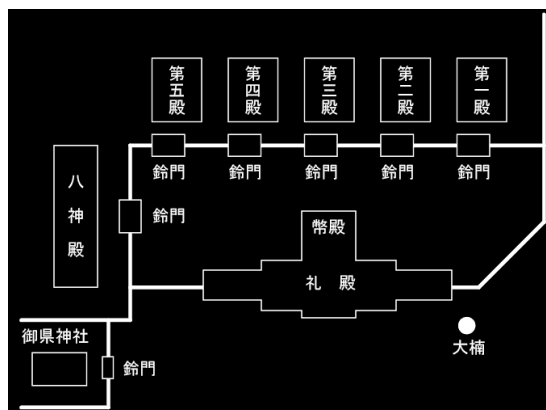
第八殿は子守宮で、祭神は鶉苴草葺不合尊(ウガキフキアエズノミコト)です。彦火火出見尊(山幸彦)と豊玉姬命の子で豊玉姬の妹の玉依姬を后にし、イワレビコノ尊(後の神武天皇)を生みます。

第九殿は一万・十萬宮(いちまん・じゅうまんみや)で祭神は国挾槌尊(クニノサヅチノミコト)と豊斟渟尊(トヨクムネノミコト)、この二神は神代七代の二番目、三番目の神です。それぞれ「土」と「雲」を神格化した神と言われます。(三ラム参照)

第十殿は勧請(かんじょう)十五所といい、熊野に關係のある祭神の十五か所を勧請した宮で、祭神は泥土煮尊(ウイジニノミコト)です。神代七代の第四神。沙土煮尊(スイジニノミコト)とともになる男女神で、泥と砂の神。(コラム参照)

第十一殿は飛行夜叉(ひぎょうやしや)で護法善神として天狗を祀るといわれる宮と言われます。祭神は大戸之道尊(オオトノジノミコト)です。神代七代の第五神。大苦辺尊(オオトマベ)とともになる男女女神で

参照資料1-8-②:熊野那智大社社殿配置図



出典:ウィキペディア)

熊野那智大社の主祭神は、第四殿に祀られる夫須美大神(フスミオオカミ)です。第三殿に速玉大神(ハヤタマオオカミ)、第二殿は家津御子大神(ケツミコノオオカミ)が鎮座します。この大社に特有なのが第一殿の瀧宮(たきのみや)で、祭神は大己貴命(オオナムチノミコト)が加わり十三所になります。那智大社のみ「瀧宮(たきのみや)」の社殿を設け第一殿にしている。那智大社では速玉大社の第一殿が第二殿となり以降は社殿がひとつずつずれる。「瀧宮」とは、那智の滝(一の滝)を神格化したもので祭神は大己貴命(オオナムチノミコト)になります。大己貴命とは出雲の国を治めた大国主命の若い時の名前である。ということとは出雲との関係がありそうです。

第五殿が天照大神の坐(い)ます「若宮」です。以上の五殿が上五社と言われる主要祭神です。その他八神は八社殿として同じ社に同居する相殿(あいでん)になります。祀られる神は速玉大社の第五殿から第十二殿までの神と同じです。第一殿に瀧宮を据えたのは修験道の広がりを反映したのですが、那智大社の第一殿の祭神が出雲の神であるということは出雲の勢力が熊野に後から侵入してきたことを表しています。

②熊野那智大社

所や大地、生殖器の神と言われます。(三ノ宮参照)

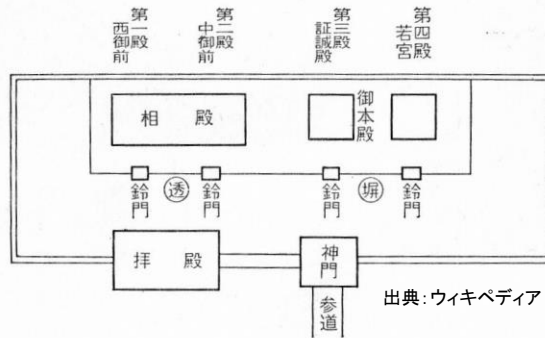
第十二殿は米持金剛(めいじんこう)で、護法善神としての宮として毘沙門天を本地仏にしている。祭神は面足尊(オモダルノミコト)で神代七代の第六神。惶根尊(カシコネ)とともに男女神で容姿や大地が整ったことを表す神ではないかと言われる。

社殿を調べていくと、記紀で祖神としてあらわす神々の総出演である。また、三山の歴史的経緯も見えてくる。熊野三山の神は速玉大神と夫須美大神の夫婦が基にあり、神代七代からイワレビコの前までの神が祭神になっている。三所権現のもう一人の家都美御子大神は本地仏が阿弥陀如来であり、衆生を極楽浄土へ導かれる如来様ということで仏教信仰の中心にある。仏教信仰の広がりから加えられたことが推察できる。

③熊野本宮大社

熊野本宮大社の主祭神は、第三殿に祭られる家津美御子(ケツミミコ)大神です。第一殿と第二殿はそれぞれ速玉大神と夫須美大神、第四殿は天照大神の坐す「若宮」です。社殿配置を見ると、熊野本宮の主祭神、家都美御子大神は第三殿の証誠(しょうじょう)殿にあるが、拝殿は相殿の前に配置されている。そして拝殿がその前に配置されているということは主祭神より前に鎮座していたことを意味するのでしよう。第四殿まで入れて上四社と言われます。本宮大社では第五殿から第八殿までを中四社と言い、速玉大神と祭神は同じです。しかし、第九殿から第十二殿までの下四社は祭神が本宮特有のものになっており、この中四社と下四社は旧社殿(大斎湯野原・おおゆのはら)に祭られています。

参照資料1-8-③:熊野本宮大社社殿配置図



注記:本宮は上四社のみお祀りし、他八社は石祠として旧社地大斎原(おおゆのはら)にお祀りしている

第九殿の一万・十萬宮(いちまん・じゅうまんみや)では、祭神は軻遇突智命(カグツチノミコト)、この神はイザナミがカグツチを産むとき「ほと」を焼かれ、黄泉の国へ行くこととなります。その原因を作った神で、火の神になります。第十殿の勧請十五所(かんじょうじゅうごしよ)の宮では、祭神は稚産霊尊(ワカムスビノミコト)であり、この神の由来は「ムスビ」が生成の意味であり、穀物の生育を司る神を意味し、古事記では伊勢神宮の下宮の祭神豊受比売(トヨウケヒメ)を生んだ神という。

第十一殿の飛行夜叉(ひぎょうやしゃ)の宮では、祭神は弥都波能売尊(ミツハノメノミコト)であり、記紀によれば日本における代表的な水の神(水神)で、カグツチを生んで陰部を火傷し苦しんでいたイザナミの尿から成った神です。

第十二殿の米持金剛(めいじんこう)では、祭神は埴山姫命(ハニヤマヒメ)であり、肥料の神といわれ、カグツチを生んで陰部に火傷をし、苦しんでいた伊邪那美命が糞をしたが、その糞から化生した神と言われる。本宮大社の下四社は伊邪那美尊の黄泉行きに係る神々で生産の神々でもあります。記紀の祖神である伊邪那岐、伊邪那美の尊の影響がかなり濃厚になってきます。

熊野権現を勧請した各地の神社は、熊野神社、十二所神社、十三社神社と呼ばれます。

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM(株) 入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在、古代史の講座をアイプレスジャパン(株) 主催や横浜市地区センター等で学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。

古代史シリーズ5「日本の神社と神々」 第一部「熊野権現の神々」

発行日 令和4年3月1日 初版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

● 本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9910882-5-4
C1021 1000E

発行: 情報戦略モデル研究所
価格: 本体価格 1,000 円 + 税

ISM
研

主な内容
はじめに 第1章 「熊野権現の神々」 第2章 「熊野信仰の礎」 第3章 「熊野速玉大社の神々と由来」 第4章 「熊野那智大社の神々と由来」 第5章 「熊野本宮大社の神々と由来」 おわりに